

10/7 実施

企 業：有限会社プレジール

テーマ：業界の未来を担う「裂地袋物縫製技術」

Q：裂地（きれじ）とは、和風の生地または革ですか？

A：革ではありません。着物地や帯地、織物などを裂地と呼んでいて、弊社はそれらを使用してハンドバッグを作成しています。

Q：生地などの素材の調達やデザインはプレジールさんが行うのですか？

A：弊社は製造卸と言う立場の為、お取引先様から材料（着物地・帯地）を預かって、お客様のご依頼にのっとってバッグを制作しています。デザインも含め基本的に取引先のご依頼内容に沿って行っています。

Q：製造ロットは？

A：1点、2点と少量単位となります。着物生地や反物で制作をご依頼頂く場合は袋分をとり、残りはお客様に返却しています。柄の指定もある場合は、取り都合なども含め一点ずつ型紙を調整しながら制作し、基本的に同じものを大量に制作することはありません。

Q：個人のお客様からの対応も可能でしょうか？

A：個人の方も、小売企業（百貨店など）とのお取引もあります。

Q：どのような技術が唯一無二なのでしょう

A：バッグに係るものしか作ったことがないので他の商品についてはわからない部分がありますが、弊社のみがバッグを作れるというわけではなく、同業他社は何社かあります。同じようなバッグを作っているところも国内に何社かあり、弊社が行っている縫製が弊社のみで出来るものなのかどうか正直わかりません。

同業他社の中では、細やかな注文（柄だしの指定など細かいリクエスト）に対して対応出来ないところも出てきている中で、弊社としては、お客様の細かい要望に応え、例えば皇室の方々がご使用になられる和装のバッグも OEM で制作していることや、失敗が許されない素材（唯一無二の裂地など）を使用してバッグを制作することが多いということもあり、技術的に高いものを有していると言えます。

Q：一緒に〇〇を作ってみませんかという提案があった場合は対応可能でしょうか？

A：可能です、ご提案いただければと思います。

Q：「へりを返す」とはどういった技術ですか？

A：生地は、縁（へり）の折り返しをしないと糸が出てしまうので、業界内では、縁を折って縫うことを「縁（へり）を返す」といいます。この部分が曲線の場合、縫ったところが波打ってしまうことがあり、高い技術を要します。

Q：後継者不足の理由は？技術継承などについておしえてください。

A：日本のあらゆる業界に共通して言えることだと思いますが、人材の育成には時間がかかります。一つ作っていくら、という工賃の世界なので、賃金体系が現代のシステムにはマッチしていないということもあるかもしれません。技術を伝える場というのありません。職人が育ておらず、こういった業態の存在をあまり知られてないということもあります。

Q：展開を期待する地域として欧米や中東とありますが、なにか理由はありますか？

A：日本の文化に対する考え方です。例えば中東であればシルクを通してかなり日本との強い関係性があります。欧米だとアメリカやフランスが中心となりますが、日本文化に造詣の深い方々が多くいらっしゃいます。また、技術を真似されて安く作られてしまうということは、できれば避けたいと思っています。

Q：ひとつ製品を作るとなった場合の納期はどれくらいですか？

A：どういうものをつくるかによって異なります。職人が生活するために必要な工賃を手にする事が出来るよう考えなければならないため、都度ご相談となります。

Q：生地の調達について作りたいもののイメージで生地を調達してもらうことは可能ですか？

A：生地の種類によります。インテリアファブリックですと、1メートル単位の手配が可能です。が、帯地や織物だと一反（30m）単位が基本となり、例えば、バッグも相当数制作しなければ処理できない量となってしまいます。また古着の世界だと、素材の出自がわからないものや品質が保証出来ないものが多く、例えば「これは西陣織ですよ」という証明が出来ない場合は、その名前を使っての販売は出来ません。著作権の問題などもあり、古いものを使用する際は注意が必要となりますが、個人の方の反物で制作のご依頼をいただいて、仕立てさせていただくという事業は実際に既に行っています。また古いものだと製作途中で糸の劣化が原因で切れてしまうこともあり、使用できない場合もあります。